医療装置が高度になるほど、使う人の力も求められる

FREE TALK フリートーク

千葉大学医学部附属病院 放射線科 教授 宇野　隆（うの たかし）

画像診断装置が変えた放射線治療

放射線科での診療には、「画像診断」「核医学」「放射線治療」という三つの大きな分野があります。近年は、CT、MRIなどの画像診断装置の進歩で、どこに悪性腫瘍（がん）があり、どこまで拡がっているかということまでわかるようになりました。それに引っぱられるように、腫瘍に正確に当てる技術も進歩し、放射線を使った治療は、いろいろな疾患に使われるようになりました。

しかし、日本は被爆国ということもあり、放射線治療というと、副作用や、がんになるのではないかという心配をされる方も少なくありません。また、がん治療の場合、患者さんやご家族の方に、治療法を選んでいただくことになります。そのため、さらに、理解していただけるように努めていきたいと思っています。

使う人の力が求められる時代

同じ名前の病気でも、人それぞれ、進み具合、体の具合、臓器の大きさが違います。CTで取得したデータは、コンピュータで分析し、一人ひとりの病状に合わせて、放射線治療のプランニングをします。このプランニングを治療装置に転送すると、機械が放射線を当ててくれます。

しかし、その装置を使って治療をするのは、医師であり、医学物理士であり、放射線技師といった人間です。どんなに素晴らしい装置があっても、位置を数センチ間違えたり、CTに映っているものを読み取れなかったとしても、機械はその診断のまま放射線治療をしてしまいます。装置が高度になればなるほど、使う人の力も求められる。そういう時代になっていると思います。

日常診療をフィードバック

臨床の現場では、患者さん一人ひとりの違いを感じ、日々、驚かされています。これだけ医学が進んでいても、標準的な治療だけで治ってしまう人がいれば、標準的な治療をしていても運悪く再発してしまう人もいるのです。

大学病院としては今後、どういう方が標準的な治療に向いていて、どういう方が不向きなのかということを追求していかなくてはならないと思います。

そして、単に最新機器を使いこなすだけではなく、より高度な治療法を開発しなければなりません。それには、われわれが日常診療で気づいた現場の経験を、治療装置にフィードバックしていく必要があると思っています。

Profile

宇野　隆（うの たかし）

東京都出身。昭和63年に千葉大学医学部卒業後、千葉大学病院放射線科に入局。国立国際医療センターでの勤務を経て、再び千葉大学病院へ。妻、小学4年の長女との三人家族。趣味は、サッカー観戦（学生時代はボランチとして活躍）とカメラ。学会の帰りなどに、風景写真などを撮るのが楽しみ。診察室には、自作の写真も飾られている。

ちばをてくてく　ホキ美術館 5

森を抜けて、美術館に行こう

千葉市でいちばん大きな公園、「昭和の森」に隣接する、自然がいっぱいのエリアに、ちょっと変わった美術館があるのをご存じですか？

この美術館、世界でも珍しい「写実絵画」専門の美術館。作家たちが、気の遠くなるような長い時間を一枚の絵に注いだ「写実絵画」は、文字どおりに写真としか見えないような精緻さ。けれども人の手で描かれた絵であり、写真にはないあたたかさが宿っているようでもあります。巨匠から若手まで約40作家300点の写実絵画を、自然光が展示エリアに差し込む、美しい空間で楽しむことができます。

森の中を歩きながら、絵画を見ているような不思議な錯覚をしてしまう、このモダンな建物は、2011年度に「第7回 日本建築大賞」に選出されたばかり。外が気持ちのよい季節です。お弁当をもって、森の中のモダンな美術館へ出かけてみませんか？　5月20日まで、「存在の美―まなざし・微笑み・憂い」展を開催中です。

ホキ美術館外観

◎ホキ美術館
千葉市緑区あすみが丘東3-15
043-205-1500
http://www.hoki-museum.jp/

トピックス

受診が必要な腰痛とは？

腰痛

腰痛は内臓や血管の病気、婦人科や泌尿器科の病気でも起こることがありますが、ほとんどは腰椎（腰骨）とその周りが原因となって生じます。人が立っているときには、腰には体重の1・4倍の力がかかるとされており、前かがみで物を持てば、さらに大きな力がかかります。

病院で治療する腰痛には、腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症などがありますが、大多数の腰痛は長年にわたり、腰椎が負荷にさらされ、しなやかさが失われることから生じるもので、心配のないものです。心配のない腰痛の特徴としては、腰痛のみのもの、叩くと気持ちがよいもの、安静にするだけで軽くなるもの、全身に他の病気がないものなどがあげられます。

1～2週しても痛みがよくならない場合や、坐骨神経痛（脚の後ろの痛みやしびれ）がある場合には、整形外科を受診して下さい。正確な診断により、心配ないことが分かれば、できるだけ活動性を上げるように治療していくことになります。同じ姿勢を長くとらない、腰を冷やさないなどの日常生活の注意、ストレッチ、水中歩行などの運動療法や、適切な薬の使用などにより、腰痛の軽減をはかっていきます。

（整形外科・教授　高橋和久）

あとがき

東日本大震災から早1年。本号では、震災直後から千葉大学病院が継続して取り組んできた医療支援に対して、宮城県知事、千葉県知事から感謝状をいただいたことを掲載しました。震災で改めて考えさせられたのは、家族や隣人の大切さ。そして地域のあらゆる方々に支えられていたこと。医療者として少しでも多くの人の助けや支えとなれるよう、常日頃から医療技術を磨いて、とっさの求めに応じられる力と余裕が持てるように、精進し続けたいと思うこのごろです。

（編集委員　看護部　田澤敦代）